

4月の資料紹介



高野長英筆 サカマタ鯨図

これは高野長英が描いたサカマタ鯨図です。

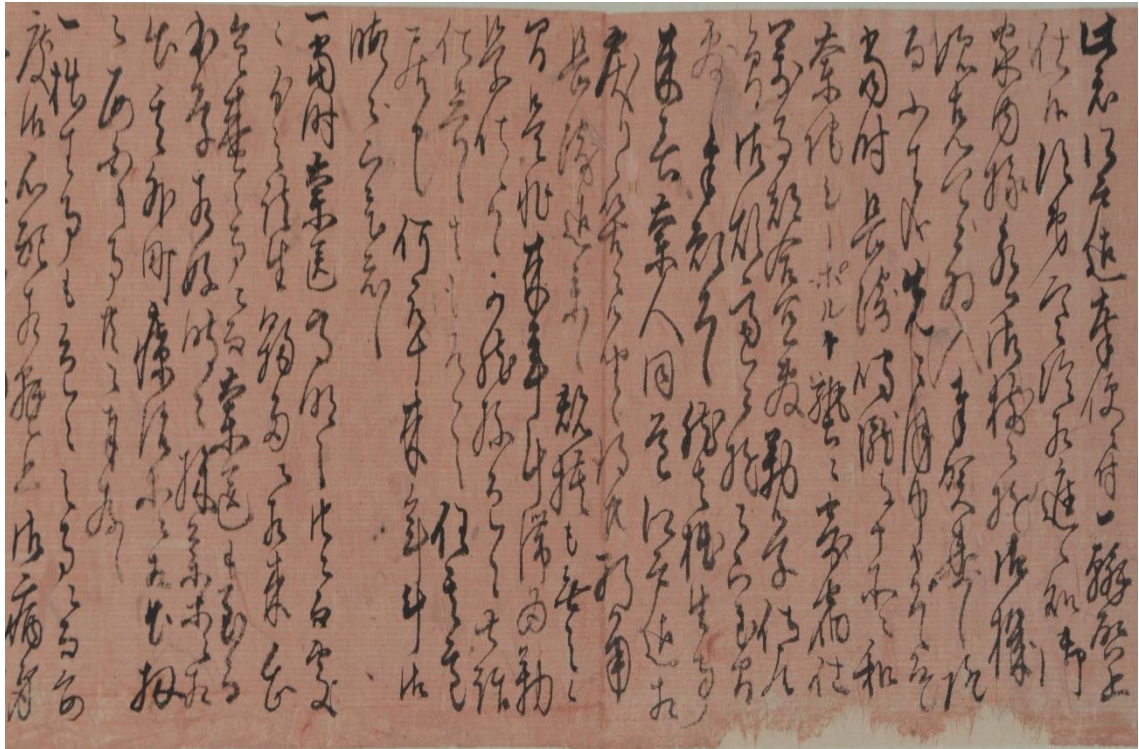
長英は22歳の時、長崎に行き、シーボルトの鳴滝塾に入門しました。

シーボルトは門人たちに西洋の最新医学を教えるだけでなく、彼が興味のある日本についてテーマを与え、オランダ語の論文を提出させました。長英は、オランダ語で19の論文を書き、その中でも、長英自ら実地調査を行った「鯨および捕鯨について」が高く評価され、シーボルトから「ドクトル」の称号(西洋医学習得の証明書)を与えられました。このサカマタ鯨図は、その研究過程で描かれたものであるとされています。

シーボルトはオランダに帰ってから、「NIPPON」「日本動物誌」「日本植物誌」をヨーロッパで出版し、日本研究の第一人者となります。

シーボルトと長英らは、当時の「ヨーロッパと日本をつなぐ架け橋の役目」を担ったのです。

長英から得たシーボルトの鯨の知識は、シュレーゲルの『日本動物誌海獣部』として、ヨーロッパで発表され、これにアメリカが着目しました。当時アメリカでは鯨の油を「機械の潤滑油」や「ランプをともし油」として必要でした。それでペリーは黒船を率いて、近海に鯨が多い日本に針路を定めました(1853年)。長英の鯨の論文が、間接的に黒船を呼び寄せ、日本の開国を促しました。



高野長英書状(高野玄斎宛)文政 8(1825)年 10 月 27 日

長英が 22 歳の時、長崎のシーボルトの鳴滝塾に入門(8 月)して 3 か月後に、養父玄斎に長崎遊学の動機について説明した手紙です。当初はオランダ人と一緒に江戸に戻るつもりでしたが、せっかく長崎まで来た面目がなくなってしまうので、もう少し長崎に留まって学問を成し遂げたいからと帰国の延期をお願いします。